



「ズバリ本書のねらいは新自由主義を旗頭に経済至上主義が蔓延し、コミュニティの崩壊のみならず社会的共通資本の縮小を招いています。これにより管理社会が徹底されると同時に格差は拡大し生き残りが狭り、人間の存在そのものが危機にさらされています。経済至上主義は近代化技術と一体になってあらゆるものを商品化していく一方でさまざまな矛盾を膨張させて外部依存を高めさせ、原発そして戦争を必然化しています。経済成長、アベノミクスがすべてを解決するという経済至上主義では真の豊かさと平和は得られないこと多くの人は気づき始めています。未来世代に地球を六トナツツとしていくためには持続的循環型社会への転換、工業原理から生命原理への価値観の転換が必須です。2008年のリーマンショックでこうした方向への転換がすすむことを期待したのですが、結果は経済至上主義をさらに加速することによって対処しようとしていくのが現状です。一刻も早く経済至上主義と近代化の呪縛からの解放、争かなるしホリエーションが必要で、このレホリエーションの力をつけるのが生命原理に基づいた農的ものの尊重であり、農の持つ社会デザイン能力の発揮です。すなわち食料自給能力、自立能力、コミュニティ形成能力、教育能力

生きがい・働きがい、実能力、文化形成能力を生かしていく。これにすべての市民・国民が少なからず関係、参加していくことを呼びかけ促すところにねらいがあります。

――本書執筆の動機は農林中金総合研究所を退職して農的社會サイエンス研究所を立ち上げた。そのねらいを自ら立ち上げた研究所の名前に掲げています。これこそ農業問題に取り組んで

**自 著 を 語 る**

**『農的社會をひろく』**



農的社會サイエンス研究所 代表 鳥谷栄一氏

またが、農業問題は農代として今、やるべき業だけでは語れない、政治や社会等も含めて整理していく必要があるという思いを強くとききました。前著「地域からの農業再興」で自分なりのいわれる農業問題について整理は概ねできたと思えますが、一方で産業界としての「農業」を中心に語ることによって「農的もの」を持つボランティア、豊穣な世界について十分には表現し得なかった。こぼれ落ちてきたものが少なからずとも感じました。

――本書の中で特に強調したいことは、いくつもありますが、特に本書の核となる考え方を代表しているのが江氏語録です。江氏はただの百姓ですが、おおいするたびに教えられることばかりで百姓の持つ確かな感覚と底力をいつも強く感じさせられます。もろもろと人間は苦しんでいる、まさに現代社会が抱える病巣の根源をついています。あらゆるものに助けられて生きていくのであり、「いらん」が人を幸せにする三世の中に使われて生きていくことがすべてである。これを教えるのが自然なのです。が「自然解」から相手と離れなくなると人間はあらためて「基本を尊ぶ」ことの大事さをおかみめ直すべきことが根柢に隠されています。

もう一つあげれば劇作家・脚本家の木村健氏の演劇観です。木村氏は演劇で殺者と観客の心を一つに共鳴していくために肉声とそれがとらぐ80厘ほどの小さな空間に徹底したこだわりを持っています。話しかけられる肉声や相手の養育本能に身体を区際さずながら、言葉を生かすときの身体の状態を算入、結果として意味を再解釈するようになる。この肉声を通して反応する状態を「心」といふ。実は人間同士の対話は無意識のうち肉声を通して共鳴させていると述べています。この「観客との一体化」は「協同」そのものであり、協同組合が協同組合であるための本質を示してくれていると理解しています。

――農的社會を創造していく見通しは、本書の序章で取り上げたらしく若者の田園回帰現象は出くわす機会は今よりも増加しており、市民農園や体験農園等をつつと都市農業に参画する市民・国民も増えるなど、農業を見守る消費者・市民・国民の目線は確実に変化してきています。単なる消費者から産地参画や産地振興へ、さらには農業への参画へと

もて次のステップとして「産」にもっとかわり、現場にかかわりながら農的社會の創造を目指しての活動に取り組んできた経験と出会いを背景に書き進めてきました。これに加えて年齢のせいというところでしょうか。もう私も幼少になりまして、言いたくも言わしてもらってもいい年頃ではないか。また次の世代への引継ぎを急がなければならぬ思いがあります。また同僚の世代であると同時に共闘世代でもあります。私にはちらかたといえはソボに近づきたいと思いますが、あの時の大学紛争で大学をして社会がこのままではいけないという思いを引きずってきたことも確かです。全共闘世

代として今、やるべきこととは何か、と問うことが、市民・国民の多くは、自然なものであり、自然解から相手と離れなくなると人間はあらためて「基本を尊ぶ」ことの大事さをおかみめ直すべきことが根柢に隠されています。もう一つあげれば劇作家・脚本家の木村健氏の演劇観です。木村氏は演劇で殺者と観客の心を一つに共鳴していくために肉声とそれがとらぐ80厘ほどの小さな空間に徹底したこだわりを持っています。話しかけられる肉声や相手の養育本能に身体を区際さずながら、言葉を生かすときの身体の状態を算入、結果として意味を再解釈するようになる。この肉声を通して反応する状態を「心」といふ。実は人間同士の対話は無意識のうち肉声を通して共鳴させていると述べています。この「観客との一体化」は「協同」そのものであり、協同組合が協同組合であるための本質を示してくれていると理解しています。

農業にステップアップし、市民・国民の農業への参画を通して食料自給能力は勿論のことと自立能力、コミュニティ形成能力、教育能力、生きがい、働きがい、実能力、文化形成能力が築かれ、顕在化し始めているように受けとめています。このような農的社會デザイン能力を引き出していくのは行政の力ではありません。あくまで市民・国民一人一人の行動による積重ねがからしめるもので、個々バラバラではなく、互いの助け合い、相互扶助があつてこそすみやかに効果的に築かれること

になります。この協同の思いこそが各国の食料主権を尊重することを可能にするともに、各国との共生をも可能にすると考えます。あくなき経済成長志向からの脱却を国家・政治に期待してもかなわない。あくまで兵元・地域を参画していくことが最も現実的な対処策ではないでしょうか。グローバル化の流れにアベノミクス、大規模化、効能化で対峙していくことは其例れを精算するしかありません。ローカル化によって対抗していくその力を奪うのが「協同」であると考えます。